

# 「どのように」を問うことで何をするのか

## ——社会学的記述としての概念分析の社会学——

東京大学 河村賢

### 1 目的

概念分析の社会学としてのエスノメソドロロジー（以下 EM）は何を問うのか。EM の問いや知見の身分をめぐるこうした問題は、自らを既存の社会学とは明確に異なるアプローチとして定式化した初期のエスノメソドロジストも論じてきた（Sacks 1963）。社会構築主義者であるグブリアムとホルスタインは『質的方法の新しい言語』において、初期 EM についての解釈に基づき、既存の社会学が人々が何をしているのかという「なに（what）」の問いに取り組むのに対して、EM は人々が自らの日常的世界をどのようにして作り上げているのかという「どのように（how）」の問いに取り組むのだとした（Gubrium & Holstein 1997: 41）。彼らの EM 理解は、構築主義的な関心を共有する社会学的研究において——分業を受け入れるか異なる問いを架橋するかといった立場の違いにかかわらず——広く受容されている。だが、本報告ではそうした EM 理解には問題があることを指摘し、概念分析の社会学としての EM が取り組む課題を改めて定式化する。

### 2 方法

エスノメソドロロジーは問いそのものの転換を伴うとする EM 理解は、分析対象であるメンバーの問題関心と分析を行う社会学者の問題関心の差異を対立させるものだった。これに対して本報告では、サックスからシェグロフに至る「社会学的記述」の議論を辿り直すことで、メンバーと社会学者の関心を過度に対立させることなく、分析とは何をする事なのかを明確化する。

### 3 結果

シェグロフは、ネパールから帰ってきた夫が、妻が行うネパールについての語りを、異なる語彙を用いて再話するというデータを分析し、まさにそうした語彙の選択において「妻をネパールについての共同の語り手としては拒否すること」を行なっていることを明らかにした。分析とは、このように「ある発話が何をやっているのかを、その発話がどのようにしてそれをやっているのか——すなわちその実践をまさにその結果をもたらすための実践たらしめている方法や装置——と結びつけること」によって遂行される（Schegloff 1988: 16, 強調引用者）。「なに」の問いと「どのように」の問いを切り離すときに見失われてしまうのは、やり方（how）を特定することで人々が「なに（what）」を行なっているかを見通しのよい記述を与えるという課題なのである。

### 4 結論

シェグロフは連鎖組織を検討できる会話データを用いることで、上述の課題を定式化した。だが「人々の実践をその実践たらしめている方法や装置」を、人々の経験に先立ちそれを可能とする「概念」と読み替えるならば、「人々が何をやっているのかをそれを可能としている概念と結びつける」という方針は、会話データのみならずテキストやフィールドノートなど様々なデータを分析するための導きとなる。この方針は、社会生活において人々が「なに」をやっているのかに関心を持つ幅広い研究にとって、記述のための道具（Sacks 1963: 2）を与えてくれるのである。

### 文献

Gubrium, J. F. & J. A. Holstein, 1997, *The New Language of Qualitative Method*, Oxford UP.

Sacks, H., 1963, "Sociological Description," *Berkeley Journal of Sociology* 8: 1-16. (=2013, 南保輔・海老田大五朗訳「社会学的記述」『コミュニケーション紀要』24: 81-92.)

Schegloff, E. A., 1988, "Description in the Social Sciences 1: Talk in Interaction," *Papers in Pragmatics* 2(1): 1-24.